

老母稲荷社について

安井 翠

1. はじめに

和光市教育委員会は、和光市中央2丁目5番地付近の住宅敷地内で保管されていた「老母稲荷社」が廃祀される連絡を受け、聞き取り調査や実測調査を行った。その後、老母稲荷社を文化財資料として保存・活用できるかの協議を重ね、今回は記録保存という形で後世へ残すこととなった。

本稿は、老母稲荷社の経緯の聴取や実測、観察を行い記録化することが目的である。

なお、石造物に刻まれた文字の読み解きは和光市文化財保護委員の並木實氏にご協力をいただいた。

2. 老母稲荷社

まず、この稲荷社は、どういった社なのかを判断しようとしたが、祠の前に置かれた鳥居の額に陰刻された最初の2文字「□□稲荷社」(図11-1)を読み解くことができなかった。

調査を進めていくと、祠内にある木札裏面に「老母稲荷大明霊」の記述を見つけた(図14-2)。そのため、「老母稲荷社」と断定し呼ぶこととした(図11-2)。

この老母稲荷社は、明治16(1883)年5月田中八百蔵によって再建されたものである(図13)。元々、老母稲荷社は寛政元(1789)年に建てられ、西広沢原に位置していたが、明治14(1881)年都合により地主宅へ移されたことが鳥居額に刻まれている(図12-1、-2)。

明治時代における西広沢原の所在地は、土地名寄帳(新座郡下新倉村)によると西廣沢原4934-1(4反9畝11歩・林)、4934-2(29歩・宅地)とわかっている(図4)。

この広沢の地は享保年間(1716-1736)に開墾され、享保17(1732)年に検地が行われた。老母稲荷は、その57年後の寛政元(1789)年に建立されたこととなる。現在の県立和光国際

高校と西大和団地の通り市道476号(桃手通り)あたりに位置していたと推測される(図3)が、はっきりとしたことはわかっていない。その後何らかの都合により、西広沢から中央2丁目の地へと移った(図5)。

また、台座には、下新倉村以外の白子村や新倉村(広沢、原新田)、膝折村や溝沼村、田畷村など現在の朝霞市に当たる近隣地域の方の名前が見受けられる(図17・18・19)。幅広い地域の講員により祀られていたことが伺える。



図1 老母稲荷社鳥居



図2 老母稲荷社正面



図3 老母稲荷推定位置図

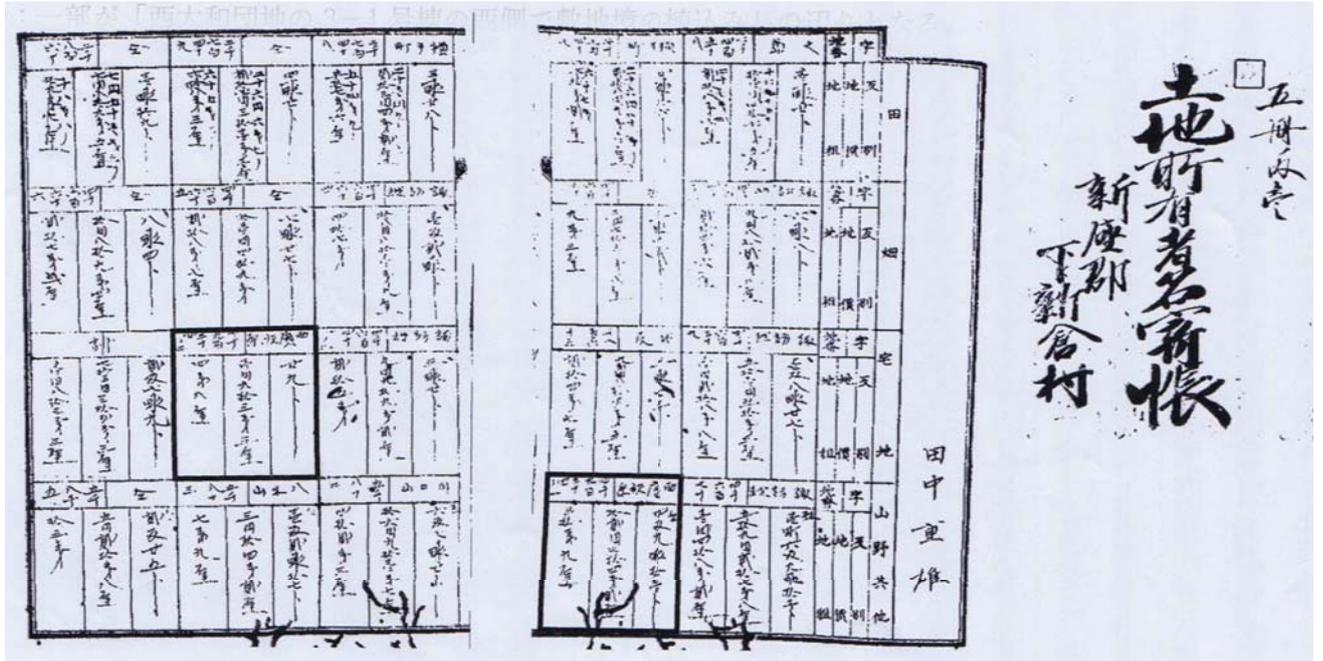


図4 土地名寄帳（新座郡下新倉村）



図5 老母稲荷社の移設地点

3. 実測・拓本調査

実測・拓本調査は、令和元年8月27日に本教育委員会が行った。また、陰刻文字の判別については文化財保護委員並木實氏の協力を得た。

漢字は、原則として常用漢字を用い、その他は原文に従ったが、原文をそこなわない範囲で、次の点を改めた。

(1) 破損などで判読できない文字は、字数のわかるものは□、□□で示した。

(2) 読点、並列点は、適宜付した。

縮尺は、実測図：1/10、拓本：原本ままのように統一した。



図6 老母稲荷社祠（正面）

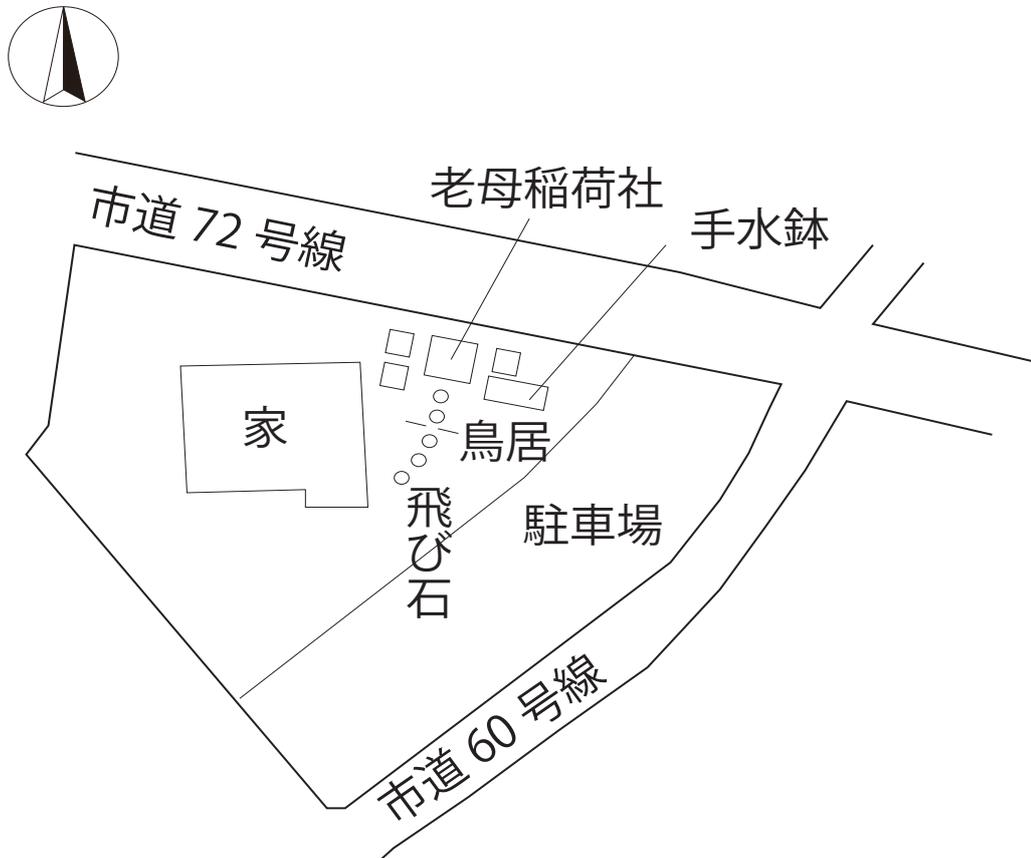


図7 老母稲荷社概略見取り図

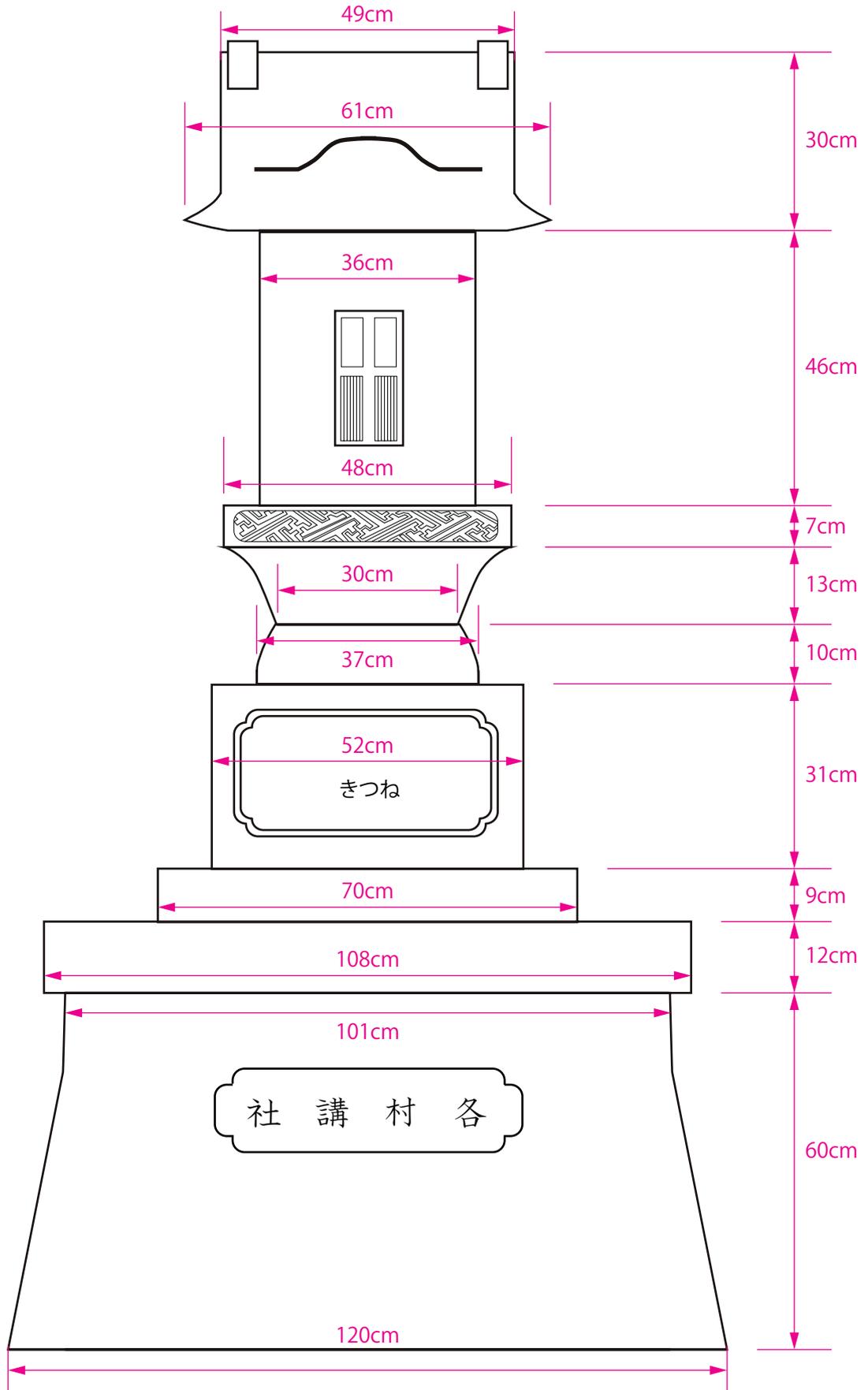


図8 実測図（正面）S=1/10

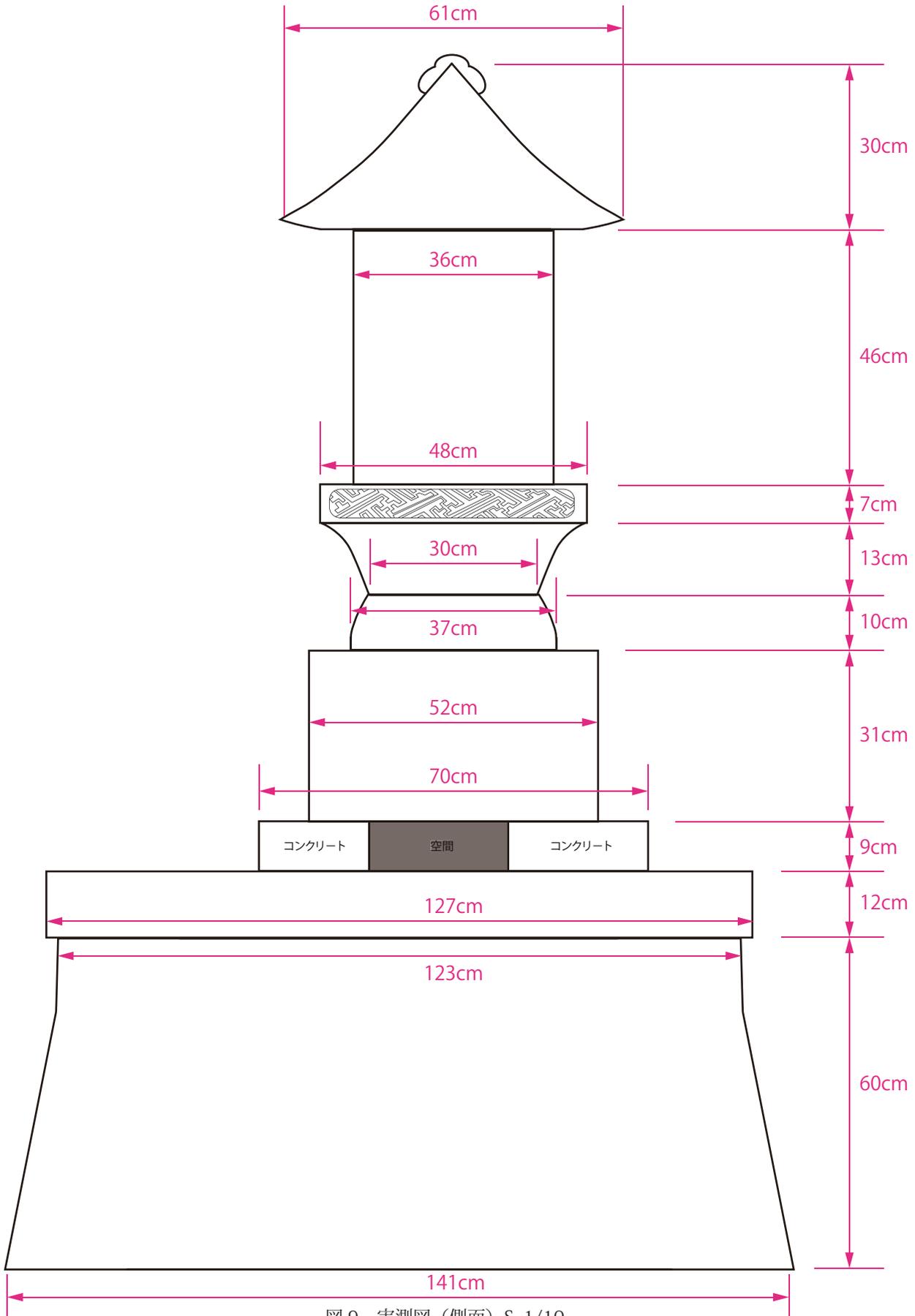


図9 実測図（側面）S=1/10

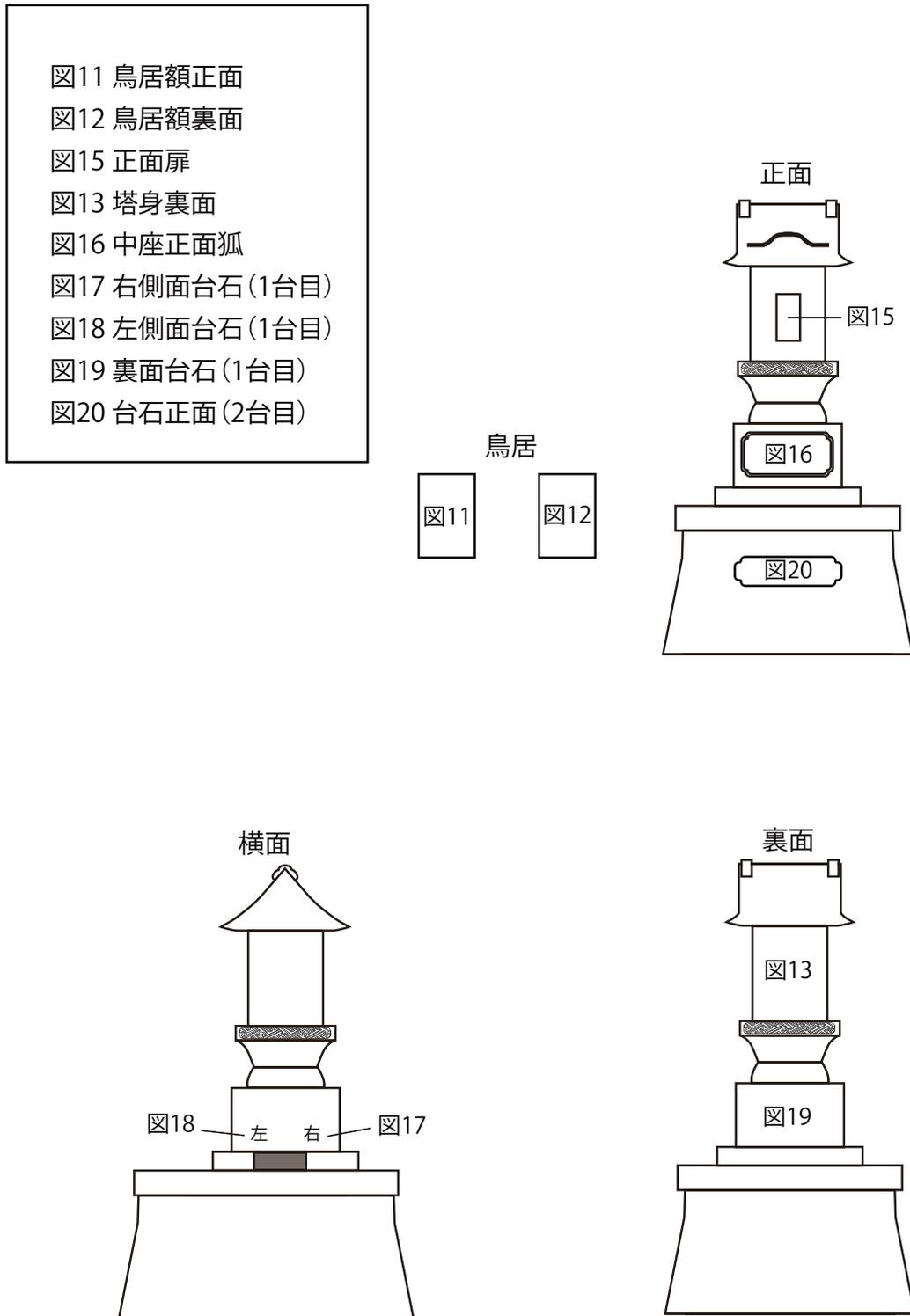


図 10 拓本配置図

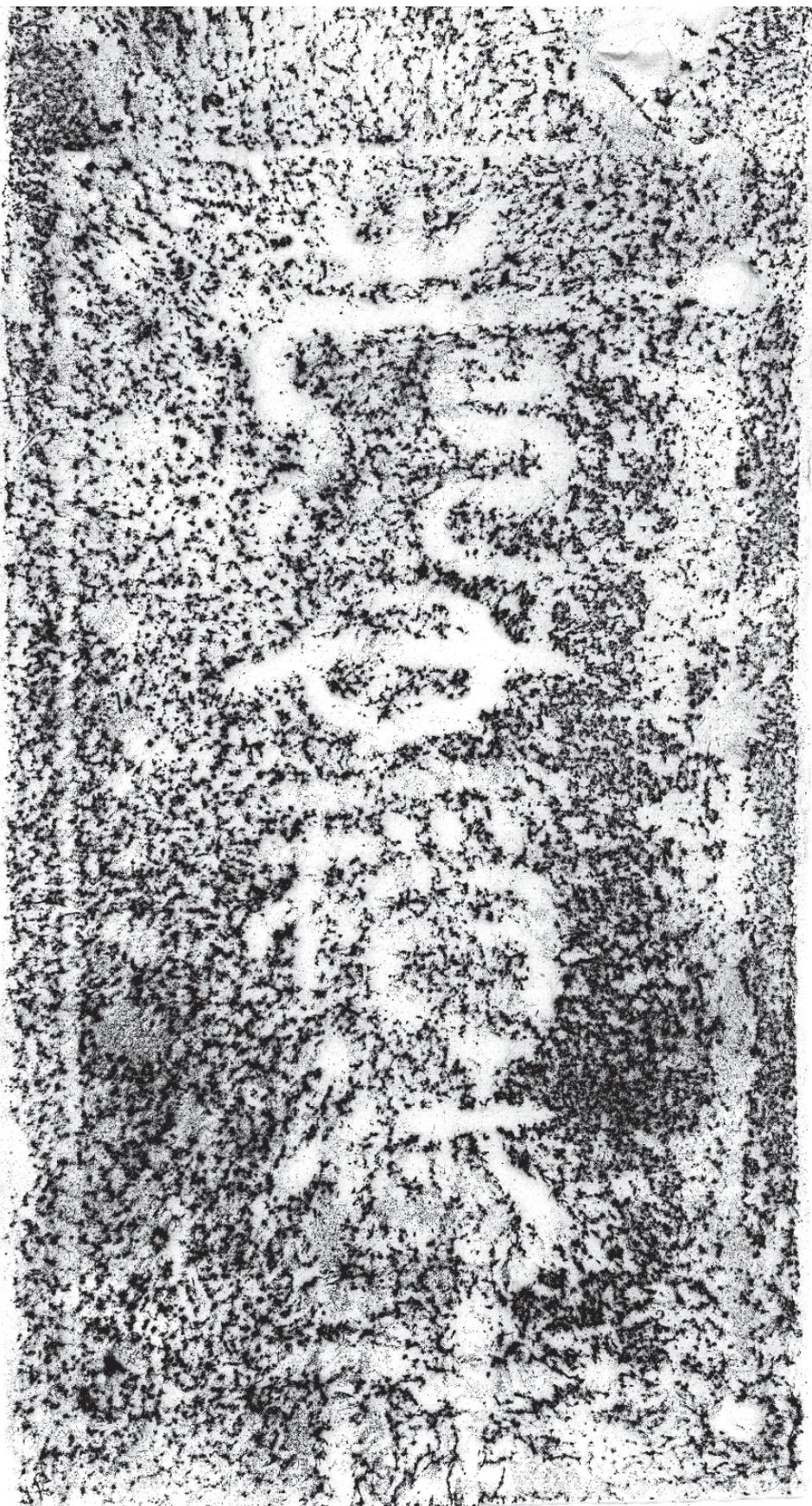


図 11-1 鳥居額正面

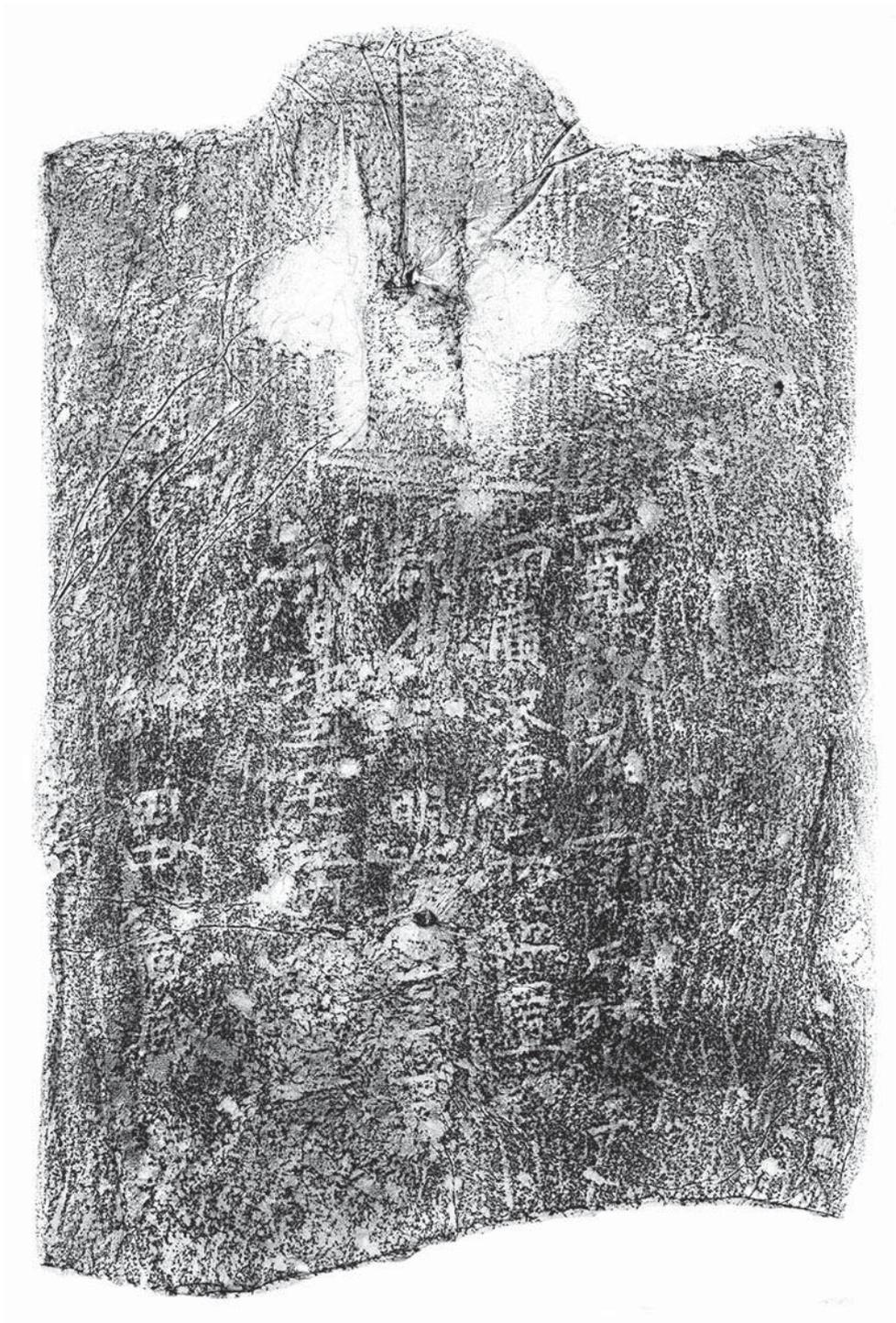


図 12-1 鳥居額裏面



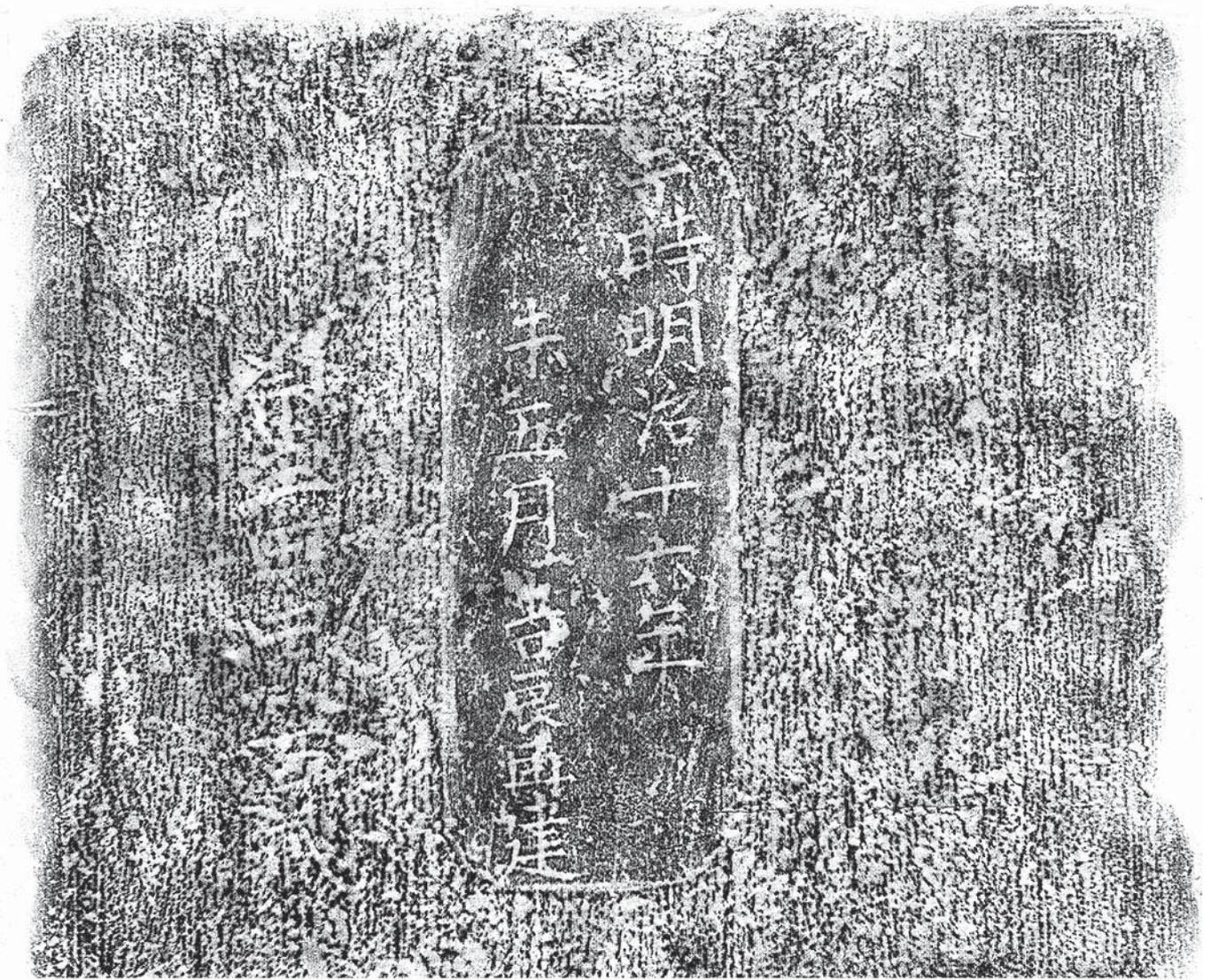
老母稻荷社

図 11-2 鳥居額正面



寛政元年ヨリ本村小字
西廣沢原山林ニ安置
都合ニヨリ明治拾四年二月
末日地主宅地内へ□□
納田中八百藏

図 12-2 鳥居額裏面



于時明治十六年
未五月吉辰再建
祭主 田中八百藏

図 13 塔身裏面



明治二十六年三月初午吉日
守護 現世安穩
後生善処
埼玉縣新座郡新倉村
第二拾八番地田中八百藏
授與込者也

図 14-1 祠内の木札（表）



我此土女穩大日天王
如来夜□□之 鬼子母神
如日月光明□□□□□□ 本□□□□□□
南無十方三世□天神 在御
本因下種南無妙法蓮華經日蓮判
南無十方三世諸□□□□
斯□□門開感□□□ 老母稻荷大明靈
諸佛皆歡喜□無量 十羅刹女
主人常充滿大月天王

図 14-2 祠内の木札（裏）

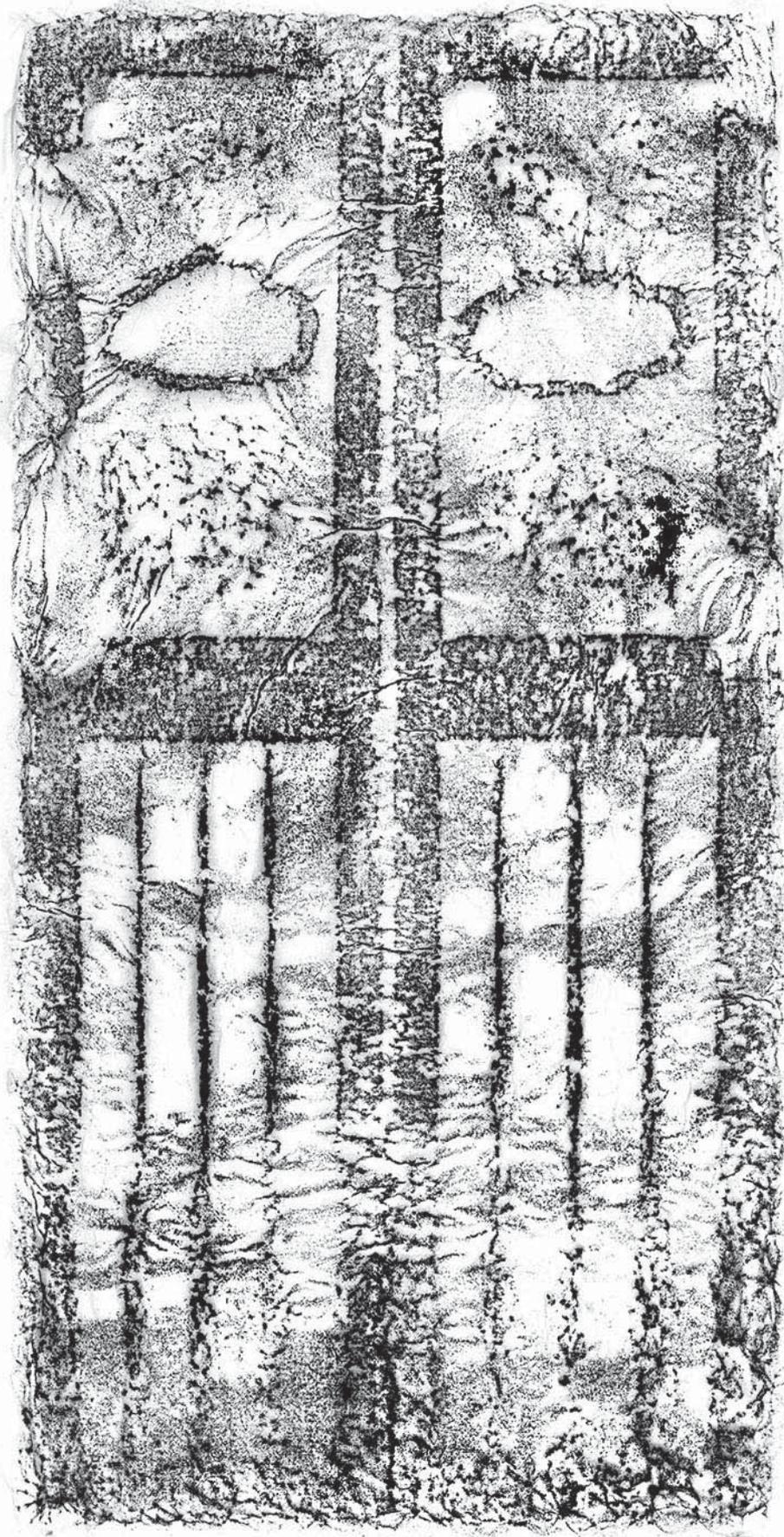


図 15 正面扉

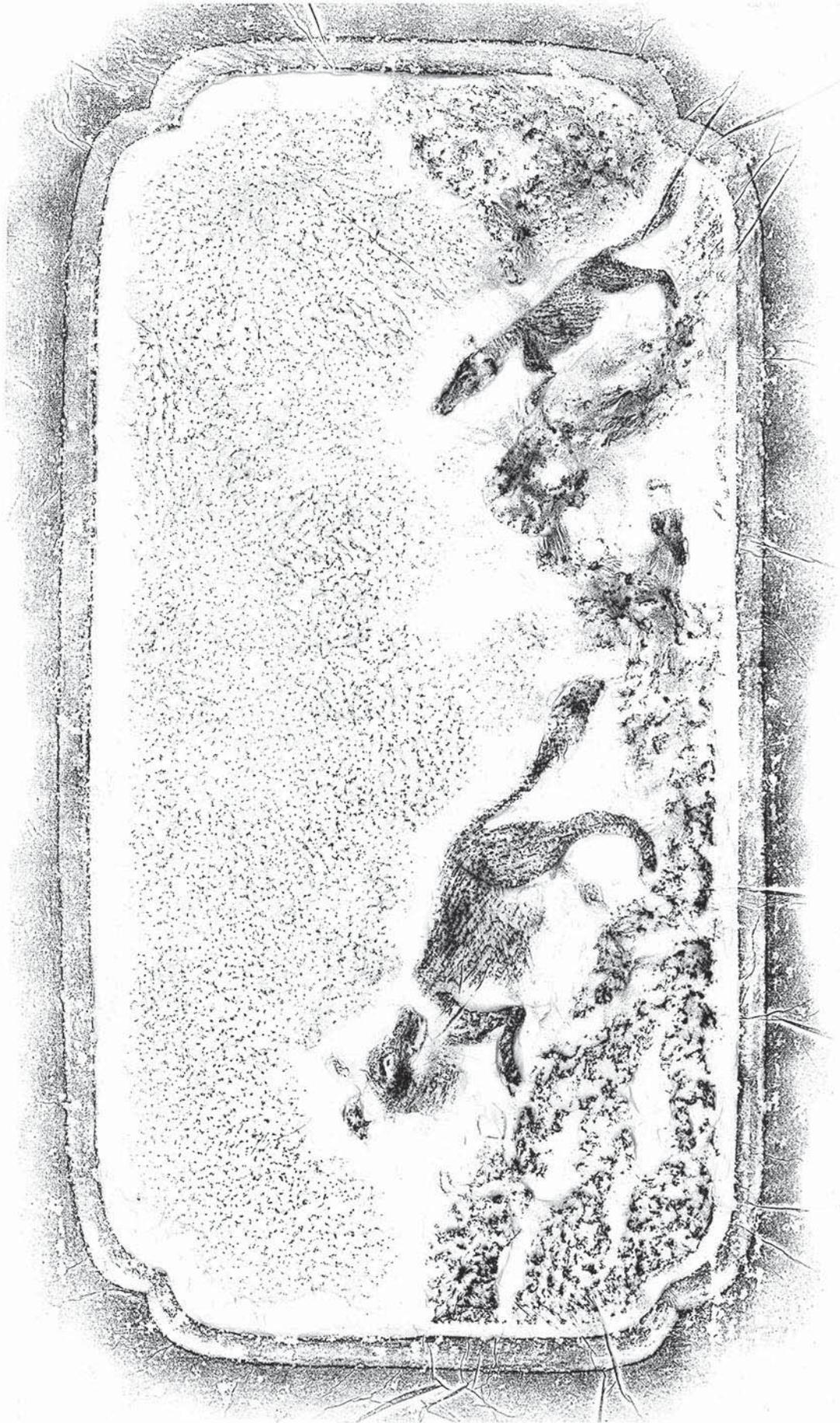


図 16 中座正面狐

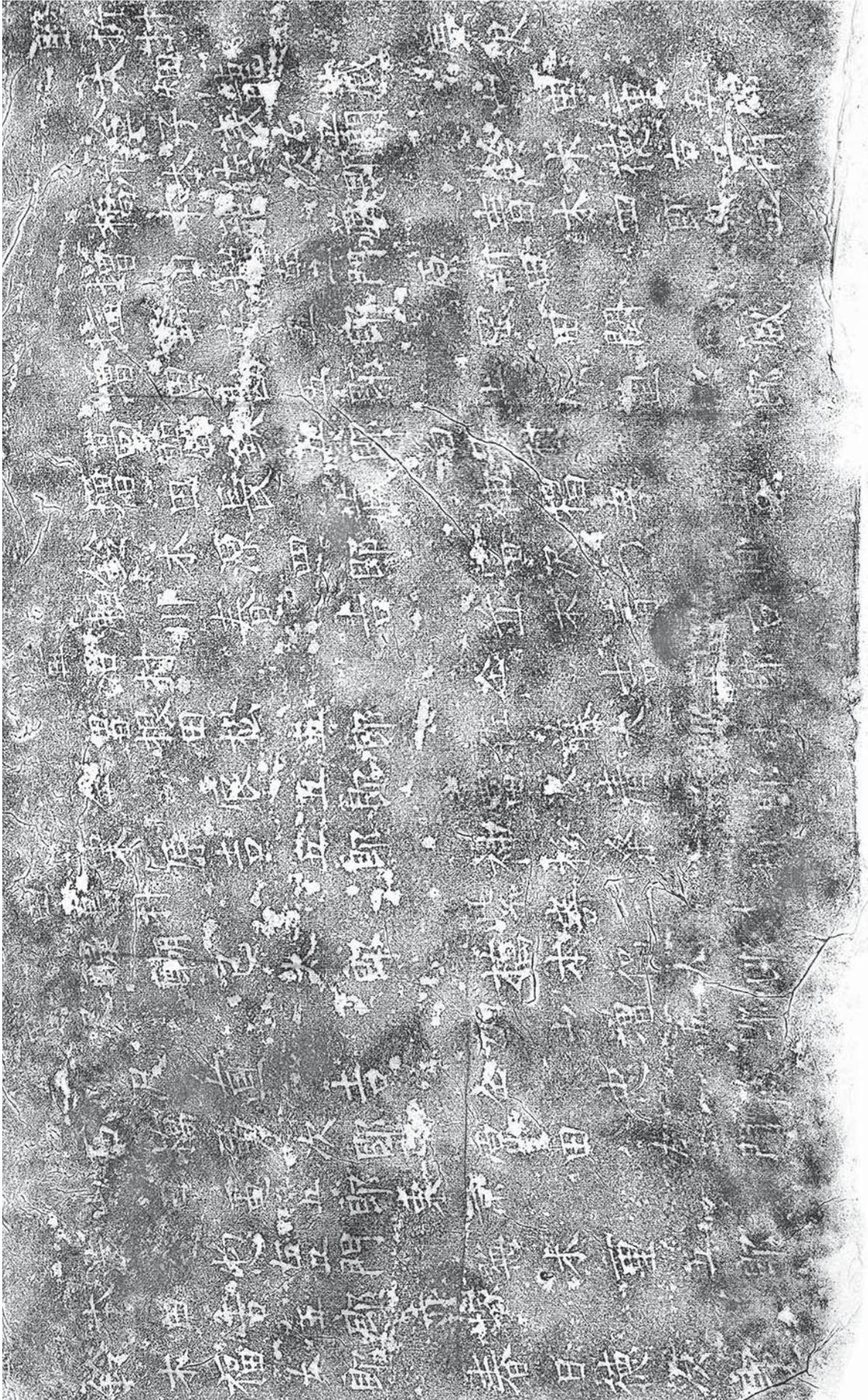


图 17-1 右側面台石 (1台目)

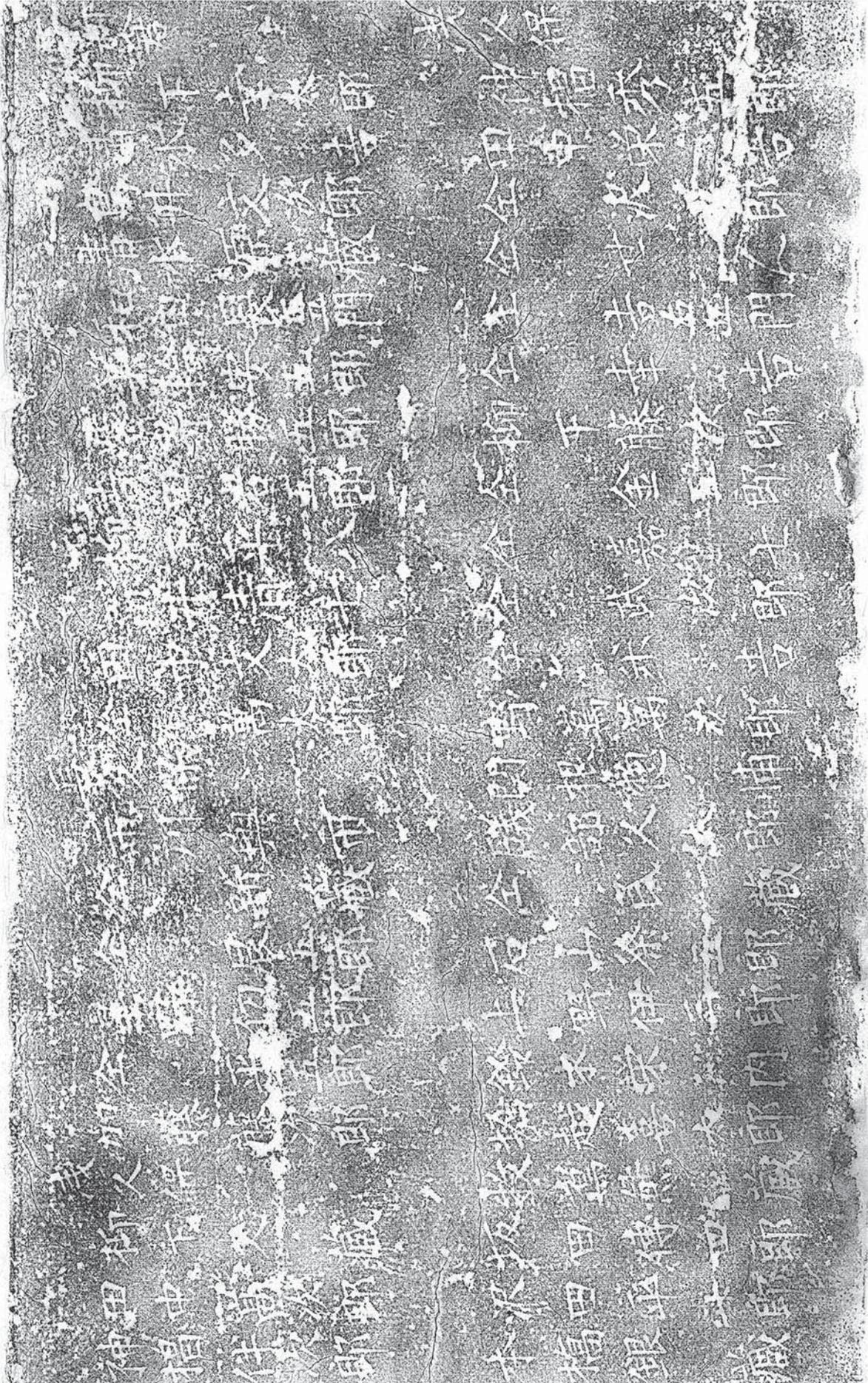


图 18-1 左侧面台石 (1 台目)

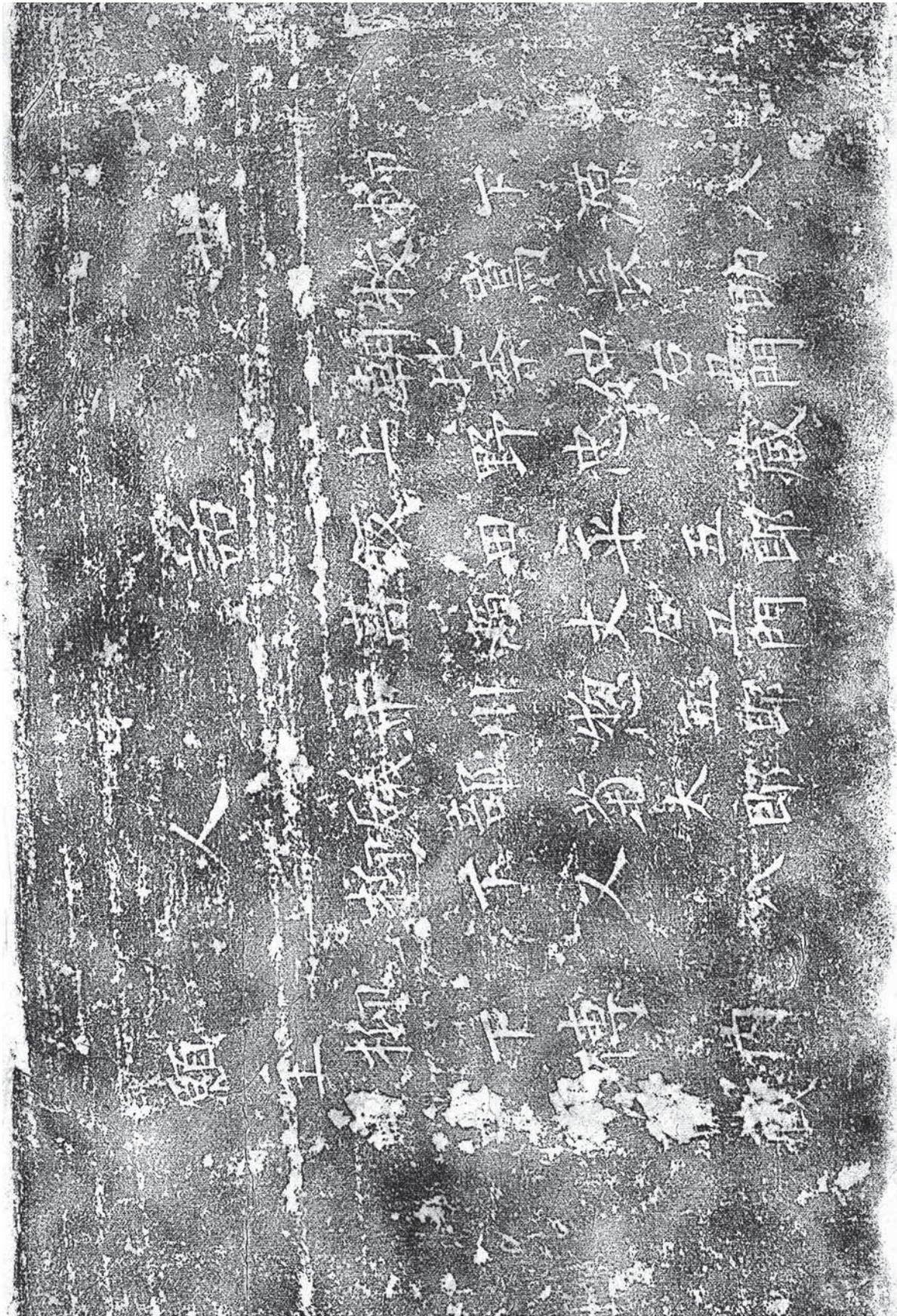


図 19-1 裏面台石 (1 台目)

鈴木福太郎	本田吉五郎	渋谷惣左エ門	山田亀五郎	石橋勇次郎	小沢 直吉	廣沢	醍醐己太郎	田嶋村	栗原吉五郎	全 辰五郎	曾根田松五郎	溝沼村	瀨川 春吉	鈴木源四郎	増田 長藏	高麗鉄五郎	増田勘五郎	塩野安五郎	増田權左エ門	橋本 瀧藏	荒木佐次郎	金子浅右エ門	木畑 龍藏	膝折村
	春日徳次郎	赤塚	蕪木重五郎	東京	原田八左エ門	廣澤	加山増五郎	橋本福太郎	紫寄 三吉	神杉糸五郎	富沢清次郎	佐藤太郎吉	全 吉□郎	並木 清吉	富沢 つ祢	神梶 春吉	白子村	上原直次郎	岡田 関藏	原新田	青木四郎兵五郎	鈴木徳右栄門	山田重五郎	

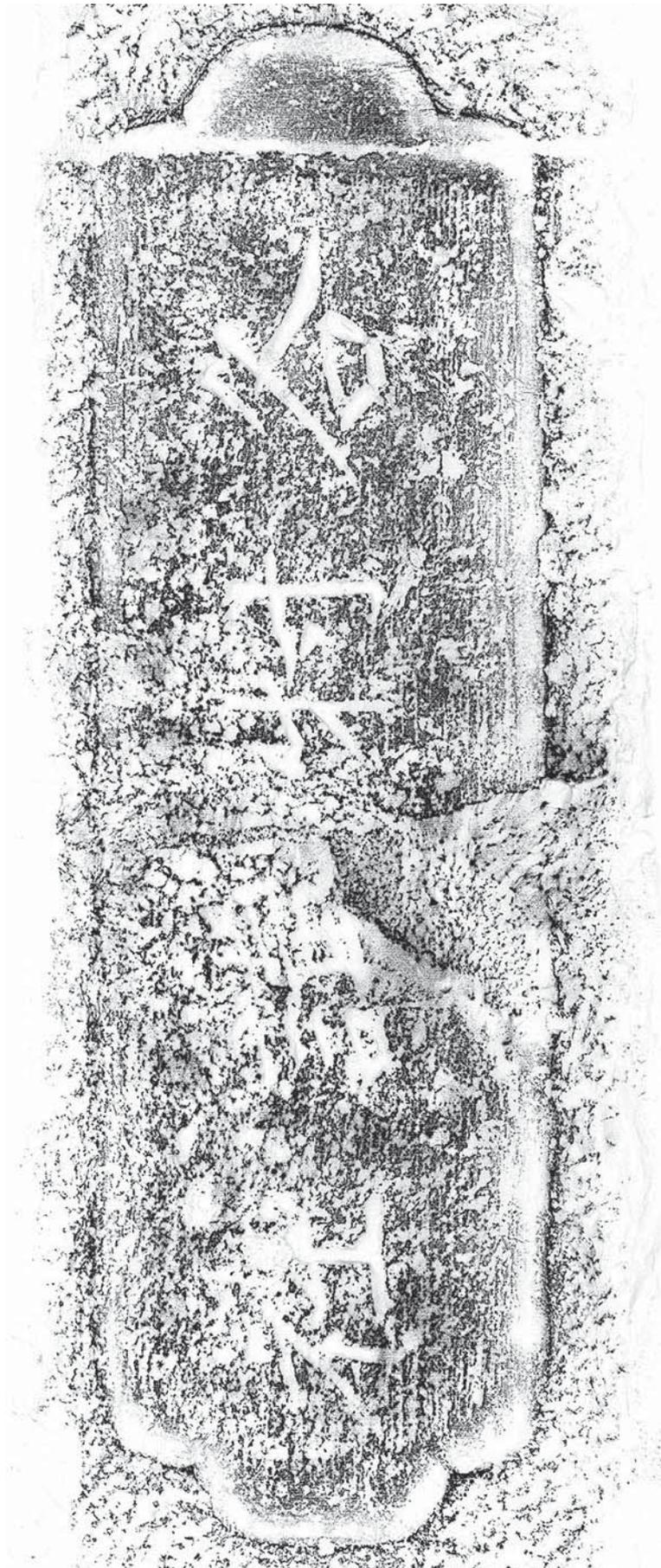
図 17-2 右側面 (1 台目)

神梶伴次郎	田中高次郎	柳下 久藏	浅久保	加藤藤次郎	全 平五郎	星野初五郎	全 辰五郎	全 新藏	市川 與市	長久保	全 萬太郎	田中文太郎	深井 清七	柳下 平八	吉田岩五郎	柴寄勝五郎	箕輪安五郎	和田長左エ門	清水 源藏	鳥居文次郎	清水 多吉	柳下幸太郎	下新倉
本橋 銀藏	沢田平十郎	坂田傳四郎	牧寫 熊藏	堀越喜太郎	鈴木 栄内	上野伊三郎	石山糸五郎	全 民藏	磯部久太郎	関根 惣輔	野嶋萬次郎	全 米吉	全 武次郎	全 嘉七	全 金五郎	柳下藤次郎	全 幸吉	全 吉右エ門	全 せん	全 沢五郎	田中 栄吉	神梶秀五郎	浅久保

図 18-2 左側面 (1 台目)

願主	柳下 傳内	柳下 又八	磯部菊太郎	市川惣五郎	高瀬丈右エ門	飯田平五郎	上野 忠藏	朝比奈仲右エ門	牧寫 長助	柳下 源八
×××××										

図 19-2 裏面 (1 台目)



各 村 講 社

图 20 台石正面 (2 台目)

4 まとめ

今回、老母稲荷社を後世へと伝えるため本稿に記録した。

老母稲荷社は、現在の朝霞市膝折・溝沼・田島、和光市の広沢・下新倉・白子・長久保・浅久保、東京都赤塚といった幅広い地域の名前が台座に刻まれており人々の交流が伺える点が特徴的である。

江戸時代の寛政元（1789）年西広沢に建てられた老母稲荷社は、明治14（1881）年に中央へ移され、明治16（1883）年に再建された。そして、令和元（2019）年9月17日下新倉氷川神社の宮司より廃祀、昇神の儀が行われた。

約100年間は西広沢の地で、その後約135年間は中央2丁目の地で、願主をはじめ子孫の方や地域の講員が信仰し、200年以上にわたり和光市の老母稲荷社として祠守されていたこととなる。

今回、住民から信仰を集めてきた老母稲荷社について紀要に書き留めることで、老母稲荷社が後世へと残り、今後活かすことができれば幸いだ。今後の課題として、老母稲荷社の名称の由来を判明することである。

最後となりましたが本稿執筆にあたり、並木實氏にご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。その他にも、ご協力を賜った方々に深く感謝いたします。

【引用・参考文献】

庚申懇話会編 1995 『日本石仏事典（第2版）』 庚申懇話会

和光市 1983 『和光市史 民俗編』 和光市

和光市歴史と文化を学ぶ会編 2013 『歩いてまわる和光の金石文と石造物』 和光市歴史と文化を学ぶ会

やすい あきら（和光市教育委員会）